6ZA-6

思い出共感促進による認知症者と家族のコミュニケーション支援

山崎 和紘† 泉 朋子‡ 仲谷 善雄‡

立命館大学大学院 情報理工学研究科† 立命館大学 情報理工学部‡

1. はじめに

近年、日本は超高齢社会となり、認知症高齢者は増加傾向にある[1]。認知症者では記憶障害によって、家族の思い出を忘れることや自身への失望や焦りを感じることが多くなり、精神的に不安定な状態になる。そして、このような認知症者を支えている在宅介護者は認知症に対する知識不足による試行錯誤や、要介護者から目を離せず、日々の介護によるストレスが溜まりやすい環境にある。また、認知症や介護に対する社会的認識の低さなど、周囲の協力が得られにくいことも家族介護の抱える問題のひとつである。

本研究では、認知症者にとって最も身近な存在である介護家族との思い出の想起を促し、共有することで、家族内のコミュニケーションの促進を図る。家族介護者は家族全員でその思い出を話題として語り合い、協力して認知症に前向きに向き合う環境作りを支援する。昨年度の写真を用いた思い出想起・共有化支援に加えて、今回は、家族それぞれのライフストーリーを多様な観点から関連づけを行う。ライフストーリーの関連づけを行うことで家族と認知症者が同じ年齢の頃の経験の異同、配偶者が認知症者と出会う前の経験など、認知症者の思い出を軸に家族が共感しあえる場を提供するシステムを提案する。

2. 前段階研究

本研究の前段階として、「認知症者と家族介護者間における思い出想起支援」を実施した[2]。このシステムは、写真と写真に付随する様々な情報を用いて認知症者の思い出想起を促し、想起された思い出について家族内で語り合うことでコミュニケーションの促進を図る（図 1）。思い出想起のトリガーとして利用する写真を用いたのは、一般的に写真の思い出喚起力が高いことと、認知症者に対しても視覚的に理解しやすく、家族の会話のきっかけになりやすいと考えたためである。

実験の評価結果として、写真と付随情報を用いることで思い出想起が可能であり、コミュニケーションの促進に繋がることが確認できた。また、高齢者の多くは自身の経験について語りたいという欲求を持っていることがわかった。そこで、自身の経験を語るために有用と考えられるライフストーリーに注目したシステムを構想した。

図 1 システム画面例

3. 関連研究

ライフストーリーは、ライフログやライフヒストリーの蓄積によって形成される。誰かに語ることで、コミュニケーションの手段となり、自分の経験に共感や理解を得ることで新たな人間関係を築くことができる[3]。

ライフストーリーを利用した研究としては、思い出構築閲覧システム your Story がある[4]。人が人生の中で必ずコミュニティ（小学校、友人グループなど）に所属してきたことに着目して、時間軸上にコミュニティを並べ、各思い出をコミュニティと関連づけて入力・整理を行えるライフストーリー作成システムである（図 2）。評価実験より、コミュニティ情報を用いて作成したライフストーリーは、思い出の整理や他者とのコミュニケーションの促進に繋がることが確認されている。そこで、本研究ではコミュニティ情報を用いたライフストーリーの有用性を生かし、認知症者やその家族を支援するシステムを提案する。

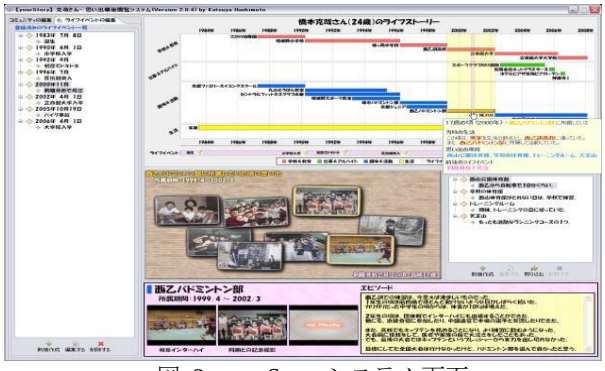

図 2 your Story システム画面

Communication Support System between Dementia Persons and their Family by Memory Sympathy Promotion

†Kazuhiro Yamasaki, Graduate School of Information Science and Engineering, Ritsumeikan University

‡Tomoko Izumi and Yoshio Nakatani, College of Information Science and Engineering, Ritsumeikan University

Copyright ©2014 Information Processing Society of Japan.
All Rights Reserved.

4. システム提案

4.1 システム概要

本研究では、認知症者の写真を用いた思い出想起支援に加えて、家族それぞれのライフストーリーを自動的に関連づけて利用するシステムを提案する。各自のライフストーリーを時間的に関連付けることで、介護者である子供が自分と同じ年齢の頃の認知症者の経験を知って共感を得ることや、介護者である夫（妻）が夫婦になる前のある時点での互いの様子を知るきっかけを与えることができる。また、それぞれのライフストーリーから印象的な出来事を家族全員で話し合いながら抽出・統合を行い「家族ライフストーリー」を作成することで、家族としての共通の軌跡を辿ることができ、思い出の整理や共有が容易になる。

4.2 コミュニティ情報

ここでの「コミュニティ」の定義は、「人が特定の目的や場を継続的に共有する社会的集団」である。人生のある時点で所属していたコミュニティに関する情報の整理をすることで、思い出を整理するベースが構築できる。コミュニティ情報の整理を容易にするために「公（public）」、「私（private）」、「家庭（family）」の3つのカテゴリに分類する（表1）。

表 1 コミュニティのカテゴリ分類例

学校・教育	幼稚園・小学校・大学	公（public）
職場	勤務先・アルバイト先	公（public）
趣味活動	習い事・部活	私（private）
生活	実家・家族の行事	家庭（family）

4.3 コミュニティ情報を用いたライフストーリー

まず、家族各々のライフストーリーを作成する（図 3）。ライフストーリーの内容はコミュニティ名、具体的なエピソード、写真や場所で構成する。以下にシステムの利用方法を示す。

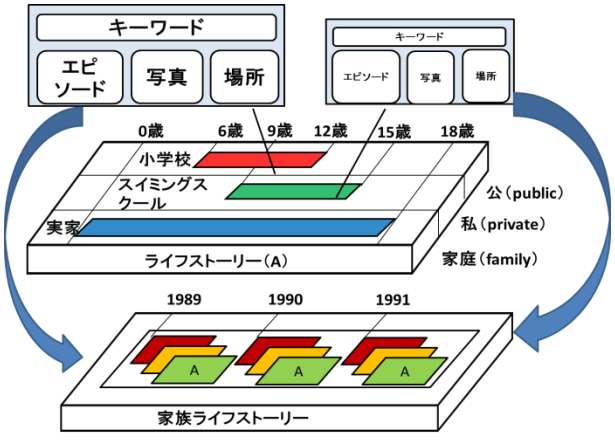

図 3 ライフストーリーの作成例

① 各ユーザは、各コミュニティに所属していたときの思い出を登録する。登録する情報はキーワード、エピソード、写真や場所である。

② システムは、他のユーザのライフストーリーに、同一のコミュニティとキーワードが存在する場合には、類似の経験をしていると認めて、お互いのエピソードにコメントを付け、エピソードを相互に関連づけて、ユーザに提示する。例えば認知症者の父と息子の間で「大学時代」という共通のコミュニティと、「大学祭での出店」という共通のキーワードがあるとき、システムが互いのエピソードを提示することで、関連する思い出想起の促進に繋がる。また、お互いの経験の異同やその人の意外な一面を知ることができる。

③ 他のユーザのライフストーリーに、同一のコミュニティ名だが同一のキーワードがない場合には、システムはコミュニケーションを促すために、エピソード内容を隠したまま、どのようなキーワードが登録されているのかだけを通知する。写真が登録されている場合にはその写真を提示し、ユーザがエピソード内容を想像しやすくする。

④ 家族は、それぞれのライフストーリーからその人の特徴を表す出来事や印象的な出来事を抽出・統合して、家族ライフストーリーを作成する。家族ライフストーリーの空白部分を埋めることで、家族の軌跡を辿れる。

⑤ 認知症者が内容を想起できない経験については、家族のライフストーリーをベースにシステムが想起支援のための雛形を作成・提示し、認知症者に確認・修正してもらう。

5. あとがき

本研究では、コミュニティ情報を用いたライフストーリーを作成し、さらに比較や特徴的な出来事の抽出を行い新たなライフストーリーを作成することで、思い出想起やコミュニケーションの円滑化を支援する。評価対象は、実際に認知症者の介護を行っている家族または介護経験のある家族とし、実際にシステムを利用してもらい本手法の有効性を確認する。

参考文献

[1] 内閣府、高齢社会白書、平成 22 年度版、pp.2-3.
[2] 山崎和紘、仲谷善雄：思い出を用いた認知症者と家族介護者間におけるコミュニケーション支援、情報処理学会 74 回大会（2012）.
[3] Atkinson R：The Life Story Interview, Thousand Oaks, （1998）.
[4] 橋本克哉、仲谷善雄：思い出構築閲覧システム[your Story]の評価、情報処理学会第 69 回大会（2007）.

Copyright ©2014 Information Processing Society of Japan.
All Rights Reserved.